

3 斜面の恵を得る



萩原 麻由
HAGIHARA Mayu

甲州市教育委員会 / 文化財課

我が国有数の果樹王国の中核を占める甲府盆地東部。緩やかな傾斜地にブドウの栽培地が広がる景観は、車中からの眺めも格別だ。勝沼から始まったブドウ栽培が近代のワイン造りへと発展した歴史を苦楽を含めて、産地に至った状況を紹介する。

ブドウ発祥伝説

山梨県の峡東地域となる甲州市、笛吹市、山梨市は甲府盆地東部に位置し、笛吹川やその支流が形成した大小の扇状地は果樹栽培に適していることから、早くから果樹に転用されてきました。その様子は「葡萄畑が織りなす風景－山梨県峡東地域－」をひとつのストーリーとして、2018年度に文化庁から日本遺産の認定を受けました。現在は「峡東地域の扇状地に適応した果樹農業システム」として世界農業遺産の認定取得に向けた取り組みが進められています。

江戸時代より山梨県では、代表的なブドウ、モモ、リンゴ、ナシ、カキ、クリ、ザクロ、ギンナンまたはクルミが「甲州八珍果」と賞されてきましたが、このうち、甲州市勝沼町には2つのブドウ発祥伝説があります。1つは718年、本堂が国宝に指定されている柏尾山大善寺で僧行基が祈願を続けていたところ、忽然として薬師如来が霊夢となって現れ、その右手にはブドウを持っていたという伝説。もう1つは1186年、上岩崎の住人雨宮勘解由が付近の城の平で山ブドウの変生種を見つけ、これを改良したという伝説です。

そんな勝沼地域を中心に、盆地をブドウ畑が一面に覆う、日本で最も有名なブドウとワインの一大産地が生まれるまでの道のりを辿ると共に、「斜面」を活かしたブドウ栽培について紹介します。



緑の絨毯を敷いたようなブドウ畑

ブドウ栽培のはじまり

勝沼地域の畑に作物としてブドウが植えられたのは、江戸時代初期のことと考えられています。1714年に行われた検地に記されているブドウ栽培地は、上岩崎・下岩崎・勝沼・菱山の4カ村に見られます。また、近村の等々力・栗原・藤井などにも自家用ブドウが植えられていたことも記録されており、庭先などに植えられたブドウは広範囲に及んでいたと思われます。

ブドウの棚架は、江戸時代初期に甲斐の医師永田徳本^{ながた とくほん}によって考案された竹棚が起原であると伝えられています。棚の広さは1坪（約3.3m²）ほどで、これを連ねて架けたため、山裾の傾斜地のブドウ畑は市中の瓦屋根が並んでいるようだ^{とく}と『甲斐国志』では形容しており、

そうした限られた場所で栽培が続けられてきたことが分かります。

甲州街道は慶長年間（1596～1615年）に整備が進んだと伝えられています。1618年、甲府盆地の東の玄関口に位置する勝沼村に、勝沼宿が新設されると、多くの物資が集散する中心地として賑わいを見せるようになりました。ブドウは勝沼宿で旅人に提供され、煙草・ナシ・カキ・木綿・茶などの商品と共に江戸市場にも並び、勝沼地域の名物となっていきます。出荷量自体は大きくないものの、勝沼地域が早くからブドウの産地と知られるようになったのは、江戸に直結する甲州街道沿いという恵まれた環境によるところが大きかったのでしょう。そのため、江戸時代を通じてブドウの栽培地は増加していきます。ただし、主幹産業は依然米作や養蚕が中心でした。

ワイン醸造の発祥と普及

江戸時代からブドウ栽培をしてきた地である利点を活かし、文明開化と殖産興業の時代に増大したワイン需要を受け、1877年8月に日本初の民間ワイン醸造所となる「大日本山梨葡萄酒会社」が勝沼町下岩崎に設立されました。同社から同年10月に高野正誠^{まさなり}と土屋助次朗^{りゅうけん}（後の龍憲）の2人の青年がフランスへ派遣され、1年間ブドウ栽培とワイン醸造を学び1879年に帰国します。この年から勝沼地域における本格ワインの醸造が始まり、現在に至るまで途絶えることなく続けられています。

明治から大正時代にかけて、ワイン醸造の発達とともに醸造用ブドウの欧米系品種が次々導入されたことで、ブドウ畑の風景が広がりをみせていきます。生食だけだと短期間で消費しなければなりませんが、醸造会社がブドウを買い取ってくれるため、農家は安心してブ



甲府盆地を緩やかに下る日川と甲州街道

ドウ栽培ができるようになりました。

また、ワインあるいはブドウの葉などから抽出される酒石酸が潜水艦のソナーに使われるロッシェル塩の原料となるため、戦時中は「ブドウは科学兵器だ」との合言葉のもと、ワインとブドウは増産されました。

初期の斜面利用

峡東地域に共通するブドウ栽培の特徴の1つとして「斜面」の利用が挙げられます。傾斜地での農業は過酷なものでありますが、ブドウ栽培にとって日照や水はけの良さ、通風性の確保などは良質のブドウを産出するための条件を満たした好適地となります。

ブドウ栽培を始める初期の斜面では、比較的手間がかからず栽培できる甲州種などワイン醸造用の品種が選ばれることが多いです。なかでも柏尾山の西側を占める「鳥居平^{とりいびら}」はブドウ生産の最適地として有名です。近年では鳥居平のブランドを求め、各ワイナリーの自家所有農園や契約農園が増えています。



傾斜地での農作業



鳥居平のブドウ畑



1900年頃の竹棚



1912年の針金棚



日本最古のブドウの品種 甲州種ブドウ(甲州)

勝沼地域の傾斜地は、明治時代の中頃から養蚕のための桑畑として開拓が進められてきました。昭和時代初期の頃まではほとんどが桑畑で、ブドウ畑は鳥居平から大善寺周辺でみられる程度でした。養蚕業が次第に衰退して、それに代わる産業として果樹の需要が高まり、1950年代の中頃には桑畑はブドウ畑と入れ替わっていきます。

桑畑からブドウ畑への転換が進んだ背景にはブドウ棚の棚架技術の革新があります。江戸時代に考案された竹棚は1879年、棚の材料を竹から針金（鉄線）に変

える実験が行われました。しかし、技術や形状面で単にやり竹を針金に代えただけであり、当時は針金が高価だったためあまり普及しませんでした。その後、腐りやすい竹を針金で架けることによって、その後の棚の維持管理が楽にできるようになりました。

1906年には、隅々まで棚を架けられるよう周囲の支柱を斜めにし、中央の支柱を垂直にする、現在のような針金棚が考案されます。それまでの棚架は6尺四方（1坪）の棚を単位としていましたが、新たな針金棚は畑一面を単位とし、より広く効果的に棚架することが可能になりました。

また、傾斜地での棚架にも工夫が凝らされ、段毎ではなく斜面全体に棚架を行うことで、隅々まで栽培面積を広げることができるようになりました。

戦後の斜面利用の変化

戦後も現金収入を求めてブドウ栽培は続けられ、1955年以後の高度経済成長を契機として果実の需要が増大し、栽培面積はさらに拡大していきます。甲州種ブドウから始まった栽培も、デラウェアや大房系のブドウ（巨峰やピオーネ等）などが商品作物として最盛期を迎えます。その結果、峡東地域の斜面においても高級品

ブドウ栽培（露地栽培）の歳時記

	デラウェア	大房系
12月～3月	ブドウの枝の剪定	ブドウの枝の剪定
4月	萌芽	萌芽
5月	除芽・誘引・ジベレリン処理	除芽・誘引・ジベレリン処理
6月	房造り・摘粒・カサかけ	房造り・摘粒・カサ／袋かけ
7月下旬～8月中旬	出荷目合わせ・収穫・手入れ・出荷	
8月下旬～10月下旬		出荷目合わせ・収穫・手入れ・出荷
11月～12月	肥料かけ	肥料かけ



石垣で階段状に造成された畑



植物を植えている石垣

種を育成する畑が現れるようになっていきました。

ブドウ栽培は4月から本格的に始まり、実の成熟具合を見逃さず、最適の時期に収穫作業を終わらせなくてはならないのですが、地域の標高差に伴う気温差により、同一の品種でも生育差が生じます。例えば巨峰の場合、収穫時期で2カ月ほどの差があると言われています。このように標高差を利用し、収穫時期を長期間にすることで労働力の分散も図ることができます。

ブドウ栽培を支えているもの

ブドウ畑の下に目を向けると、畑の区画には広い範囲で石垣が多く使われていることに気が付きます。平地のブドウ畑の低い石垣はもと水田だった名残ですが、東側の山沿いの急傾斜地については、おそらく養蚕のための桑畑として開拓が進められた折に、石垣が積まれたものと考えられます。畑の転換にあたっては、急傾斜地については等高線に沿った細長い畑とするために石垣を積み直したと思われます。石垣を設ける最も大きな理由は土壌流失を防ぐためですが、石垣を積み、土地をほぼ平らにすることで、棚架に適した階段状の畑となるのです。

また、石と石の間から土がこぼれないように形の合った石を選別して埋め込み、チャノキやリュウノヒゲなどの植物を植えて石垣の維持を図り、石垣が崩れた際には近所の農家の人々が助け合って修復します。

傾斜地のブドウ畑を支える縁の下の力持ちは、このような石垣群なのです。

苦労を「喜び」へ

流通の効率化を図るため、山梨市、甲州市、笛吹市の甲府盆地斜面の果樹地帯を繋ぐ広域農道「フルーツラ

イン」が開通しました。現在では農耕車ばかりでなく車やバイクも行き来し、ブドウ畑の広がる風景を眺めるなど、ブドウやワイン、あるいは「ここでしか見られない景色」を求めて、毎年県内外から多くの観光客が訪れています。

かつて桑畑や水田が広がっていた耕地から日本で最も有名なブドウとワインの産地に成長するに至った背景には、状況に柔軟に対応し、一から開拓をして長い年月をかけて積み上げてきた先人たちの努力があることを忘れてはなりません。

そして、1年を通して行われる農作業の苦労を収穫の「喜び」へと変えて、先人たちの思いと共にブドウ栽培とワイン醸造の伝統を受け継ぐ勝沼地域の方々によって、ここのブドウ畑の美しい景色がつくられているのです。

「斜面」は農業者の作業環境としては過酷で決して楽なものではありませんが、ブドウ栽培は斜面が持つマイナスをプラス面に変え、活かしていくことができるのではないかと思います。



晩秋の風景。ブドウの種類によって紅葉が異なる